

方々歩いて旅すれば
いろいろな出合いと
発見がある。
見て聞いて歩いた
まちの旅日記。

まちを歩く

Vol.6

紀州天音山道成寺①

〔前編〕

室町時代から続く「絵解き説法」

和歌山県白高郡川辺町

文・写真 岡部知子



▲位置図



▲「道成寺の顔」院代を務める小野俊成さん

紀勢線の「御坊駅」駅前には、想像していた風景とは異なり、区画整理された景観にアスファルトの路面が逆光で光っている。降りた列車が発車したあとには、人気のない静寂が流れ、客待ちのタクシー運転手は、新聞で顔を覆って寝ている。音も無く静止した景観に唖然としてしまった。それでも、流れる南西の風には心地よい潮の香りが乗っかって、都会の排ガスに慣らされた嗅覚がそれを敏感に感じ取る。千三百年の歴史に触れたくて訪れた私に、この「潮の香」は遠い昔のそれと同じ。

した。わずか10分足らずの間に大型バスがぎつぎに到着し始めたのである。参道は活気に満ちていた。「道成寺」参拝のきっかけは旅先で見つけたチラシだった。見出しに「33年に一度！ 道成寺秘仏御開帳。33日間だけの公開」という活字が目にとまった。急務の旅であるはずもない私は、いつものようにフラリと訪れた。歴史を超え、凛と胸を張っている日本建築を眺めているのが好きだ。観ているだけでその時代の物語が想い浮かんでくる。風化した木目や瓦、暗中の礎石、等々を

喘ぎ、仏寺においては時代環境の変化に苦しんでいる。ビルの谷間にある墓地、老朽化した寺を建て替えるにも都会における「消防法」の壁は高く、オフィスビル風建築の「お寺さん」はめずらしいことではない。かろうじて原型を保っているお寺があったとしても、ビルに囲まれ檀家の足は遠のいているのが現状。あるお寺さんでは、抹茶や手作りの和菓子を準備して、昼休みのOLに提供し、その代価は随意の「お布施」として受けている。また別のお寺さんでは老人介護の「デイ・ケア・サービス」に参加している。地域社会と共存することが将来の経営基盤に役立つことを期待しての策であろうが、暗中模索というのが本音だろう。

じかも知れない……と勝手な想像をさせていた。

「道成寺」へ行くには、この御坊駅から普通電車

に乗り次ぎ「道成寺駅」で下車すればよいのだが、

私は強いて歩くことを選び、曲がった小道は田畑

を割って集落へ続いていた。20分も歩いたころ、

みやげものの屋が並ぶ参道に出た。10時は過ぎてい

たが、参拝客はまばらで、呼び込みの掛け声だけ

が空を飛んでいる。しかし、その場の事態は急変

眺めているだけでその時代に陶酔してしまう私。

それを愚かな自己満足だと戒めるもう一人の自分

がきまって登場する。しかし、普段からそれは強

引にねじ伏せることにしている。

「天音山道成寺」。この寺の知名度はかなり高い。

有名である理由の一番は「安珍・清姫」の物語が

素材となった能楽、人形浄瑠璃、そして歌舞伎に

よるところが大であり、西暦701年の建立には

1300年の歳月がながれ、国宝指定の仏像が所

蔵されている。それは和歌山県に存在している

……これが世間一般の認識だろう。しかし、まず特

筆すべきは平日にあっても大繁盛しているお寺さ

んなのである。この事実を知らない人は多い。都

内の例を考えると、コンビニが約45000

件、仏寺72000件がシノギを削って奮闘して

いる。両者とも客が来てくれて「いくら？」の世

界である。コンビニが連鎖店として生き残るため

には増えつづけるしかない……という経済原則に

返し対応している。室町時代から続けられている

というこの「絵解き説法」。悲恋ものであるのだ

が、熟練された「語り手」による伝統芸が、人々

を陶酔の境地へと誘い込んでしまうのだ。訪れた

者のみぞ知る事実であり、何度もここを訪れてい

る人は多い。

副住職を務める小野俊成さん「ここは通過点な

のです。だから、昔から宿場町としての発展はな

かったし、今も1300年前も同じ通過点なので

す。最終目的地へ向かうときの休憩地なのです。

ま、考えてみれば恵まれていますね」と語る。現

在は白浜温泉、勝浦温泉へ向かう客が中継地とし

て立ち寄ることが主になっているが、世界遺産と

して登録されたことも追い風になっているのだろ

う。奈良平安時代の皇族は「熊野詣」のために室

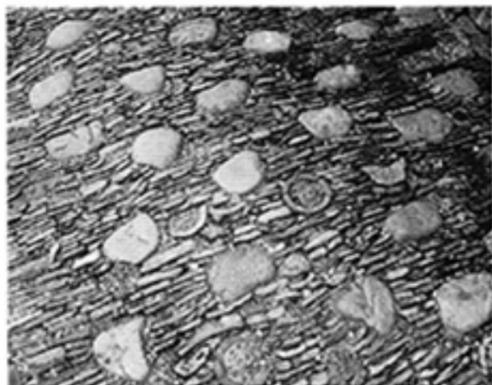
の湯（白浜温泉）へ向かうが、その途中には必ず

立ち寄った。こうした旅の行程は1300年前の

文武天皇に始まり、近代の天皇に至るまで淡々と



▲心柱のエピソードは238年前に生まれた



▲数百年の務めを果たした瓦。今は敷地を守っている



▲やはりここでも「蓮」は重い脇役



▲「絵解き説法」に癒しの時間が流れる

が現れ、お金さえ出せば庶民でも利用できるようになった。そして、お伊勢参り・西国巡礼などが許可制で認められ、庶民の行動範囲は急激な広まりをみせていった。昨今ほどの情報網が確立されていなかった当時、諸国を旅してきた僧侶・山伏たちは「道成寺」に立ち寄った。各地の出来事、物語を見聞きしてきた情報はこの境内で語り伝えられた。宿場町ではなかったこの界隈では、一般の民家に僧侶・山伏が投宿していた。泊めた側のメリットは、未知の情報を得ること。語られる世間の情報に心躍らせて聞き入ったのである。もちろん、そこには庶民の信仰心・もてなしの心が支えとなり、僧侶・山伏は無銭で旅を続けることができた。参勤交代による情報伝達は知られているが、藩の職務であることにその限界もあった。それよりも庶民に近い僧侶・山伏のほうが、話題の幅は広くワクワクする情報源であったのだと思う。ありとあらゆる情報が地球上を駆け巡っている現在、情報を提供するほうも受け取る側も、究極のストレスが飽和状態にあることを、人々はどこで気付くのだろうか。文芸・報道、あらゆるジャンルの情報が洪水のように流れ、それに頼りながらも人々は疲れている。「絵解き説法」の瞬時に何か安堵する気持ちを感じ、聞き入っている人々の顔を眺めながら、私はこの人たちと同席できたことがとても幸せに思え、何故か私は「知らぬが仏」の言葉を思い出していた。

おかべ・ともこ

繰り返された。
「道成寺」は今も街道の通過点としてなんら変わっていない。小野副住職が幾度となく「ここは最終目的地ではなく、大木山にあるような終点的な要素はまったくない寺なのです。しかし、今風に言うとしたら『メディアの形態』が大昔から確立していたのだと思う」と語ったことが興味をそそった。その昔、諸国を旅することが限られた時代があった。許されたのは貴族・武士・僧侶のみ。庶民が遠出の旅に出ることはなかった。そして、戦国時代を過ぎると規制緩和が進み木賃宿・旅籠

が現れ、お金さえ出せば庶民でも利用できるようになった。そして、お伊勢参り・西国巡礼などが許可制で認められ、庶民の行動範囲は急激な広まりをみせていった。昨今ほどの情報網が確立されていなかった当時、諸国を旅してきた僧侶・山伏たちは「道成寺」に立ち寄った。各地の出来事、物語を見聞きしてきた情報はこの境内で語り伝えられた。宿場町ではなかったこの界隈では、一般の民家に僧侶・山伏が投宿していた。泊めた側のメリットは、未知の情報を得ること。語られる世間の情報に心躍らせて聞き入ったのである。もちろん、そこには庶民の信仰心・もてなしの心が支えとなり、僧侶・山伏は無銭で旅を続けることができた。参勤交代による情報伝達は知られているが、藩の職務であることにその限界もあった。それよりも庶民に近い僧侶・山伏のほうが、話題の幅は広くワクワクする情報源であったのだと思う。ありとあらゆる情報が地球上を駆け巡っている現在、情報を提供するほうも受け取る側も、究極のストレスが飽和状態にあることを、人々はどこで気付くのだろうか。文芸・報道、あらゆるジャンルの情報が洪水のように流れ、それに頼りながらも人々は疲れている。「絵解き説法」の瞬時に何か安堵する気持ちを感じ、聞き入っている人々の顔を眺めながら、私はこの人たちと同席できたことがとても幸せに思え、何故か私は「知らぬが仏」の言葉を思い出していた。



▲14年前に解体・修復された本堂



▲参道から眺む62の石段